

アワプラジオ通信【2015年9月号】

インタビューシリーズ

南米各地の先住民族や紛争地域で生きる人々の日常と社会活動を記録する

フォトジャーナリスト 柴田大輔さんに聞く



1980年、茨城県土浦市生まれ。2004年に一年間ラテンアメリカを旅して以来、コロンビアを中心にエクアドル・ペルーの人々を取材。12年11月よりメキシコ、コロンビアへ。現在はコロンビア南部で紛争避難民の取材中。

■公式ブログ <http://daisukepp.blog116.fc2.com/>

——現在の活動を始めたきっかけを教えてください。

遺跡に興味があり、マヤ遺跡やマチュピチュを見たくて南米に行ったのが最初でした。当初は1年くらいかけて多くの箇所をまわろうと計画していたのですが、グアテマラの村に行ったとき、1カ所に長く滞在して人間関係を築いていくことのおもしろさに気付いたのがきっかけでした。

グアテマラの公用語はスペイン語なのですが、グアテマラの先住民族が暮らしている村に外国人も受け入れているスペイン語学校があり、おもしろそうだなと思って3週間ほどホームステイをしながらそこに通いました。

コロンビアには102の先住民族がいると言われていますが、その中で偶然知り合って一緒に暮らすこ

とになったのがカウカ県に住んでいるナサ、ミサック、そして今回、日本に呼んだアワという民族です。

——外部からの人をそんなにすんなり受け入れてくれるものなのですか。

コロンビアの場合はそもそも観光客が少ないですし、民族が住んでいるのは観光ルートから離れている上に地元の人でもそう簡単には行けない土地なので、あまりオープンではなかったです。

最初に先住民族の村に行ったとき僕、宿がありませんでした。そんなときたまたま乗り合いトラックで一緒になった人が「うちに泊まりなさい」と声をかけてくれました。多分哀れんでくれたのでしょうね(笑)。それでその人がいろいろな方を紹介してくれて、みんなで一緒にごはんを食べたりしているうちに多くの方と関係を築いていくことが出来ました。

もともと地域の繋がり自体がとても密なので、一線を超えると親しくなれるのだと思います。

——コロンビアでは紛争が50年も続いていますか。

目に見える被害としては避難民の問題がありますが、僕自身は目に見えない被害のほうが重要だと考えています。紛争というと銃撃戦や空爆で大量に人が死ぬイメージがありますが、コロンビアの場合は争いが慢性化しているため、ある日突然、誰かがいなくなる、また別の日に違う人がいなくなる、という状態に陥っています。

たとえば、コロンビアには敵対しているグループがいくつかあるのですが、ある人はたまたまどこのグループに所属している人に水をあげてしまった、もしくは食料を売ってしまったがために、そのグループの協力者と見なされ、別のグループに殺されて

しまったということがありました。そのような事件が慢性的に起きており、コロンビアの紛争は暗いジメツとしたイメージがあります。

(和平交渉によって)一応終わりに向かっているとは言われています。ただ過去に何度も交渉が決裂してきています。国民は誰もが終わらせたいと思っていますし、武装グループも政党として政治に参加していく合意が出ているそうです。

現在、和平交渉をしているのがFARC(コロンビア革命軍)というグループなのですが、同じFARCでも交渉をしている中心の人たちと末端のゲリラ兵では全く考え方が異なり、末端には若い人が多く、また必ずしも政治的理念やイデオロギーで活動しているわけではありません。ですから今はまだ上からの統率でまとまっていますが、それが外れてしまったときに本当に武器を置くのかと地元の人々は心配し、そもその紛争の原因である社会格差が解決されていないままでは、戦争は続いて行くと感じています。

——5月と6月にゲストを招待して「コロンビアスピーキングツアー」を開催したそうですね。

紛争で最も被害を受けたアワ民族のリーダーであるホセさん(60歳)を日本に呼んで、広島、京都、

愛知、茨城、北海道、東京の6都市を回り、計15回の講演を行いました。以前から、自分が関わってきた民族の人を日本に呼んで何かをしたい、日本でもっと知ってもらいたいという思いがありました。

僕が向こうに行ったときはいろんな方のお世話になるので、逆に自分の親や友人に現地の人々を紹介できたら面白いし、そのかたわらで少し講演ができたらなというくらいに考えていました。正直これほど大きなイベントになるとは思っていませんでした。

ホセさんは専門家のように現状を説明するのではなく、どうやって生きていくか、紛争で傷ついた地域をどのように立て直すか、これから新しい未来を築いていく上で何を大切にしていくかという共感しやすいテーマを語っていただきました。厳しい環境で生きている人だからこその強いメッセージは多くの人を引き付けるものがあったように感じました。

コロンビアで先住民というのは社会の中でも下層に置かれています。以前、彼の住む地域に学校を作ってほしいという要請を出したのですが見向きもされませんでした。ですから日本で立場に関係なく、多くの人が自分の声に耳を傾けてくれて、質問をしてくれることがすごくうれしかったみたいです。

(しばただいすけ)

<まとめ：井上舞香>

Abe's VIEW Vol.10 「官僚的！」 あべこう一



10代の頃から音楽を通じて表現活動も行い、大学を出て就職してといったようなルートも避けてきて、自分は枠にとられない自由人気質の人間なのだとなんとなく思い、信じてきました。

ところが30歳を過ぎて2009年にはアワラジオに参加し、翌年から編集長となった頃から、自分は意外にルールや前例踏襲などにこだわる官僚タイプだなということに気がきました。それは立場上、そう振る舞うしかなかったというのではなく、心から秩序や礼節を望む自分自身の発見でもありました。

本当は官僚タイプである自分と「俺は社会にちゃんと適応することを避けて歌とか作っているから芸術家タイプなのだろうな」という思い込みとのギャップ。その気付きを活かす一つのアクションとして、当時の勤務先は特に服装について厳格な規定はなかったのですが、それまでのジーパンやTシャツをやめてジャケットやネクタイ、スーツなどを身に付けて出勤するようになりました。

とは言うものの、もともと官僚的な組織やコミュニティで、そこに合わせるべきことを強制されるのはやはり嫌。ある程度ゆるい雰囲気の中で官僚的に振る舞う状況こそが、自分にとっていちばん居心地のいい空間なのです。せいぜい自由人で良くも悪くも適当な人が多いコミュニティの中で、「あべさんってちゃんとしているよね～」なんて言われて過ごすのがちょうどいいのであって、田舎の小さな学校で成績が良いからといって、優秀な人しかいない進学校へ行こうなんてことは考えないほうがよさそうです。

本の紹介

お金がなくても平気なフランス人 お金があっても不安な日本人 (2007年1月)

吉村葉子 著・講談社文庫・605円



パリで二十年間暮らした日本人がお金という視点で見たフランス人。人種や文化の違いがあつて当たり前なのだがこれが面白い。

例えば人を招くとき、ちょっと余所行きの料理や名の知れたワ

インを準備するお金がない場合フランス人はどうするか。彼らは「お金がなくても自分ができること」をする。冷蔵庫にあるもので作れる普段着の料理をふるまい、ワインはゲストに持ってきてもらう。大切なのはみんなで共有する”時間”であり料理やお酒は二の次だから。

日本ではお金を持っていないこと、十分なおもてなしができないことを恥ずかしがる風潮がある。だがフランスでは価値に値しないお金を支払うことの方がバカバカしいと思うようだ。

それは幼い頃からの教育も影響しているのだろう。彼らはリサイクル品の教科書を何代も大切に使い、体操着の代わりにパパの安物のトランクスを持ってくる。若い女性だって安い服をリメイクして楽しんでいる。だがそれを誰かから笑われるなんてことはない。

お金がもたらす見栄に振り回されることなく、物事の本質を捉えているフランスのお財布事情。日本のおもてなしの心も美しいが、お財布を開ける前に海の向こうで固く紐を閉じられているお財布があることを思い出してもいいかもしれない。(浅香友里)

謎解き 洛中洛外図 (2003年3月)

黒田日出男 著・岩波新書・821円



絵に描かれた内容は単なる想像や絵空事ではなく、たとえば事実そのものを映しているのではないにしてもその時代の何らかの情報を与えてくれる。本書は絵画をもとにした歴史研究であり、ジャンルを超えた研究間の協調とその重要性を訴える試論である。

近隣同士である学問でさえ分化してしまったために、同年代を研究する歴史系学問同士でも一方で常識とされるものが他方では新発見に等しいものになってしまう。屏風の成り立ちを中心点に据え中世史学、民俗学、建築史学、美術史学等複数の学問領域から得られた成果を反映する。

洛中洛外図と呼ばれる屏風はいくつかあるため、それぞれ上杉家本、歴博甲本などと区別がつけられる。そのなかで上杉家本洛中洛外図に焦点を当ててどのような経緯でこの屏風が制作されたか、そして歴史学の要である成立年代の推測に到る。織田信長が上杉謙信に贈ったと言いつたてられてきた当の屏風だが、長らく疑われることのなかったその根拠に関して疑問が呈される。

普段歴史として教科書で学ぶ内容もこのようにさまざまな資料を読み解き、学会や論文発表をへて長い時間の吟味の上でまとめられていく。歴史学が実はとてもダイナミックな学問であることを感じさせる。また先行研究の読破も研究の上では重要で必須ともいえるが本書はその姿勢も強く打ち出している。

(内藤千尋)

※内藤さんの本の紹介は今号で最終回となります。

<アワプラジオ通信を毎月お送りします！>

毎月下旬ごろ発行しているアワプラジオ通信の購読を希望される方には1,000円(一年分の送料として)にて発送いたします。ネットの時代だからこそ“紙の手触り”は新鮮かと思えます。メールまたはハガキにお名前、お届け先、メールアドレス、アワプラジオ通信の購読希望であることがわかるようにご記入の上、お申し込みください。振込先を添えてすぐに発送いたします(申し込み先は4ページ最下段)。

千代田区社会福祉協議会(東京)の中にあるちよだボランティアセンター(3階エレベーター横)で、最新号をお持ち帰りいただけます。

あべこう一の音楽活動

■2015.9.25(金) 下北沢 LOFT (東京)

時間：18:30 Open/19:00 Start

会場：下北沢 LOFT

(小田急線・京王井の頭線『下北沢駅』南口5分)

チャージ (1Drink 付) :

前売¥1500/取り置き・当日¥2,000

出演：達麻/中臣和哉/羽田将也/あべこう一

●あべの出演時間は21時頃を予定しています。

●前売をご希望の方はお名前、発送先、希望枚数を明記の上、アワプラジオクリエイティブまでお申し込みください。振込先を添えて発送いたします。

■2015.10.11(日) 板橋わいわい祭り(東京)

※詳細未定。

■下北沢スムルトロン(東京)で毎週火曜日19:00~22:00に開催のオープンマイクに時々出演中!

出演のある日のみ前日~当日のあべの Twitter、Facebook 等でお知らせします。

会場：下北沢スムルトロン

(小田急線・京王井の頭線『下北沢駅』北口・西口5分)

チャージ：1オーダーお願いします。

●10分程度演奏します。出演時間は毎回異なります。

■あべこう一のCDアルバム



夏に消えていく
(2013年作品・1543円)

1. 夏に消えていく
2. 君と僕と冷えたコーラ
3. イニシャル 2013
4. 雷 Dance!
~雨の夜のサーカス~
5. タイムカプセル



東京実験 (2012年作品・2038円)

1. いろりカフェー
2. 悲しくもおだやかな世界
3. Change
4. イニシャル
5. 無題ドキュメント
6. 風のドラマ
7. 雷の下で雨粒に撃たれ

●詳細はこちら <http://k-abe.jimdo.com/shop/>

インターネットラジオ アワプラジオ

■東京ラブレター(毎週木曜日・21:00~21:30)

首都圏で活動する NPO や NGO、市民グループや個人の方を紹介する番組です。

●9月のオンエア【3日、10日、17日、24日】

「ボランティアだけで何か質問ある??」

ちよだボランティアセンター 夏休み体験ボランティアスタッフ・中学2年生

及川万里奈さん・橋本結衣さんに聞く

ナビゲーター：あべこう一、高木祥衣

●番組を聴くには

【パソコンで聴く】「サイマルラジオ」にアクセス。「近畿」→「FM わいわい」を選択。※Macの方はWindows Media Player をダウンロードしてください。

【スマートフォンや iPad で聴く】サイマルラジオに対応したアプリ「TuneIn Radio」をダウンロード。(検索窓で「FMYY」)。



下北沢 LOFT・2010年10月31日

<すべてのお問い合わせ>

awapuradio@gmail.com/090-6833-1491

編集後記

白菜やきゅうりを買ってきてビニール袋に入れて塩をかけて揉むとおいしい漬物が簡単にできます。最近ハマっています。(阿部浩一)

発行：アワプラジオクリエイティブ

107-0052 東京都港区赤坂3-21-5 三銀ビル3F サポートコール内

TEL: 03-6856-0722 FAX: 03-6856-0723

<http://awapuradio.com/> awapuradio@gmail.com